

# 無目的語現象について

小泉 直

## 1. 無目的語現象

英語における他動詞は、(1) から(4) に示すように、目的語が顕在化していなければ一般的に非文法的である。

(1) Has she taken her medicine?—\*She has taken.

(Halliday and Hasan 1976: 202)

(2) \*Did you lock? (Fillmore 1986: 98)

(3) \*I'll murder. (Kilby 1984: 48)

(4) \*I'll open an account if you'll open (Quirk et al. 1985: 905)

しかし、他動詞の中には、状況により、目的語を欠いていても容認される場合がある。菅原 (1994) はそのような場合を無目的語現象と呼び、多くの例とともに以下のようなタイプに分類している。

[A] 言語的文脈（通例は先行する）から目的語に相当する要素を唯一的に補充することで動詞（文）の意味解釈が完全になる場合。

(5) At last she thanked them and *left*.

(6) He turned away and walked quickly up the passage. I locked the door and *followed*.

(7) was in the middle of a quiet meal when the tanks *attacked*.

(8) The sentry fired at the door and fortunately *missed*.

(9) Only two or three hundred men belonged to the Union before the war, now thousands *joined*.

(Collins COBUILD English Grammar)

(10) A: Show me your essay. B: I'll *show* you later.

(Quirk et al. 1985: 723)

(11) I tried to learn to play the piano but I can't *play* well yet.

(Lehrer 1970: 242)

(12) The three had earlier drawn straws to decide who should deliver the child, and Doctor MacKenzie, the family G.P. *won*.

(J. Archer, *Kane and Abel*)

[B] 使用の説明に典型的に見られるが、目的語に相当する要素が先行する言語文脈というよりは発話の場面(situational context)から唯一的に補充されることによって、動詞(文)の意味解釈が完全になる場合。

(13) *Keep* out of the reach of children.

(14) *Shake* well before use.

(15) For further information please *cut* out and *return* to X.

(16) Empty the contents of this packet into a medium sized saucepan and *stir* in 1 1/2 pints of cold water. *Bring* to the boil, *stirring* frequently. Partially cover the pan and simmer for 4 minutes, *stirring* occasionally. (Soup Mix)

[C] 欠落している目的語が動詞の意味から補われるが、補われる意味内容がかなり制約される場合。<sup>1</sup>

(17) Are you eating again?

(18) Do you drink?

(19) He teaches.

(20) I don't want to read.

(21) I don't want to catch you smoking again.

[D] 文法化されていない目的語が不特定の人を表す場合 (Chomsky (1986)、Rizzi (1986)、Brody and Manzini (1988)等参照)。

(22) He likes to shock/please.

(23) He must be convinced if he is to convince.

(Collins COBUILD English Grammar)

[D] 複数の他動詞が対比的に使われる場合。

(24) He'll lie, steal, murder—anything to further his ambitions.

(Kilby 1984: 48-49)

(25) Money markets are the places where people with money buy and sell.

(26) Some people build while others destroy.

(27) We gave, they took.

[E] 再帰代名詞が目的語の場合。

(28) I'm shaving.

(29) They're dressing.

(30) She's washing (herself/the clothes).

## 2. 不変化詞との結合

前節では、他動詞であっても目的語が欠けることを許すような場合が幾つかあることを見た。しかし、このうち[C]のタイプについて、Fraser and Ross (1970)は、(31)の例を挙げ、動詞が単独で用いられている時には目的語の非顕在化が許されるにもかかわらず、down や up のような不変化詞と結合すると目的語の非顕在化が容認されなくなると述べている。

(31) a. John drank (\*down). (Fraser and Ross 1970: 264)

b. \*Jack is drinking up. (ibid.: 265)

同様な指摘は Fraser (1974)にも見られ、(32)は括弧内の目的語が削除されると容認不可能な文となる。

(32) \*Harry eats up (leftover) for breakfast. (Fraser 1974: 10)

Mittwoch (1971) は、(31) が容認されないのは、drink up や drink down における不変化詞が [+completive] という意味素性もつからであると説明している。つまり、これらの不変化詞は、すでに始まっている行為を終わらせる、あるいは、その行為を完全に実行するという意味素性をもつことから、目的語の名詞に [+count] もしくは [+definite] という意味素性の存在を要求する。しかし、(31) と(33) は、そのような要求が満たされていないために容認不可能になるというわけである。

(33) \*He drank down/up beer. (Mittwoch 1971: 257)

逆に、そのような要求が満たされていれば文の容認可能が高くなるはずであるが、西脇 (2008) は (34)の例を挙げ、Mittwoch の主張が正しいことを証明している。<sup>2</sup>

(34) He drank up all the beer. (西脇 2008: 126)

### 3. 例外的な例

前節では[C] のタイプの動詞について、down や up のような不変化詞と結合した場合には [+count] もしくは [+definite]といった意味素性をもつ目的語を取らなければならないことを見た。<sup>3</sup> しかし、実際にはそのような制約を免れる例が存在する。最も典型的なのが命令形で用いられる場合で、Fraser and Ross (1970)と Fraser (1974) は次のような例を挙げている。

(35) Drink up! (Fraser and Ross 1970: 265)

(36) eat up (Fraser 1974: 10)

しかしながら、西脇 (2008) は、目的語を取らなくてもよい環境は命令形だけに限られるわけではなく、他にも幾つか存在すると論じている。そこで以下では、西脇が提示している他の 5 つの環境を順に考察する。

### 3.1. 「要求」という発話の力

西脇(2008) は以下に挙げる (37) から(40) が形式的に命令形ではないにもかかわらず、文全体として「要求」という発話の力 (illocutionary force) をもち、このような場合にも目的語の非顕在化を許すと論じている。ここで、「『要求』の発話の力をもつ」とは、話し手が聞き手に対して、ある行為を行うべきである、とか、行ってほしい、という内容を伝えることを意味する (西脇 2008: 129)。(37)では(用意された食事を)全部食べてほしいという要求、(38)では満腹になるまで食べてほしいという要求が表されている。<sup>4</sup>

(37) “I hope you ate up,” she said, sitting her on the stairs to  
change the child’s shoes. (BNC: EEW)

(38) When you eat up, you become full.

一方、(39)では飲み干してほしいという要求、(40) では病気にならないために飲んでほしいという要求が表されている。

(39) if it were me, if it were you, we’d drink up (BNC: FAS)

(40) If you don’t drink up, then you might get sick.

### 3.2. 行為を修飾する副詞表現

西脇(2008) は、ある種の副詞表現が eat up あるいは drink up という行為を修飾している場合にも目的語の非顕在化が許されると述べている。(41a) では just as usual、(41b)では well、(42)では really がそれぞれ eat up という行為を修飾し、どのように行為がなされるのか、あるいは、なされたのかが説明されている。

(41) a. Foinavon passed the post with his ears pricked and that  
night he ate up just as usual. (BNC: HJ3)

- b. Well my head man's told me that everything's okay and he's eat [sic] up well this morning and, and, he's doing well.

(ibid.: HYC)

(42) Wow. He can really eat up.

また、(43a)では watching the gloveman、(43b)では quickly、(43c)では laughing がそれぞれ drink up という行為を修飾し、行為の様態を記述している。

(43) a. She drank up, watching the gloveman. (BNC: CJA)

b. Patrick drank up quickly. (ibid.: FAB)

c. He drank up, laughing. (ibid.: GUX)

### 3.3. 動詞句あるいは節の等位接続

西脇(2008) は、eat up が動詞句や節が等位接続される環境に現れる場合にも目的語の非顕在化が引き起こされると述べている。(44a) は動詞句が等位接続されている例、(44b) は節が等位接続されている例である。

(44) a. And trainer Paul Cole said yesterday: "She's come out of the race very well and has eaten up ....." (BNC: CH7)

b. you can wait because er it'd be time, she'll have eaten up and then she'll say ooh I'll have another round I haven't had any (ibid.: KSS)

### 3.4. 行為に関する情報が文脈から補われる場合

西脇(2008) は、(45)ではコロン以下の文脈によって目的語の非顕在化が許されていると述べている。

(45) Inside they are drinking up: two hundred and fifty black fellers nursing their last long drinks. (BNC: J13)

(45)では何を飲んでいるのかが不明であるとしても、コロン以下の文脈から、少なくとも飲むという行為が 250 人という大人数によって行われること、そして、その行為が長く続くということがわかる。したがって、コロン以下は drink up の対象とその行為の様子をある程度補う文脈となっている。西脇はこのような文脈も目的語の非顕在化を促す要因になると論じている。

### 3.5. その他：whether/if ... or not 型・発話への返答

西脇(2008) は、(46)では、where が whether の誤りであるとした上で、ここでは「食べたかどうか」に焦点が当てられていると述べている。

(46) Cos er, I, I used to say them I know where [sic] they've eat up  
or not, I do, and we've got them. (BNC: HYC)

また、(47) では “I didn't ate [sic] up” が “I hope you ate up” という発話に対する返答となっており、(46) と同様「食べたかどうか」に焦点が当てられていると述べている。

(47) “I hope you ate up,” she said, sitting her on the stairs to  
change the child's shoes. “No I didn't, I didn't ate [sic] up,”  
Artemis told her. (BNC: EEW)

西脇はこのような whether/if ...or not 型と発話に対する返答も目的語が非顕在化するための要因になると論じている。<sup>5</sup>

## 4. 要因間の共通点

前節では、目的語の非顕在化をもたらす原因として命令形の他に以下のような5つの要因が関与することを見た。

- (48) a. 「要求」という発話の力をもつ
- b. 行為を修飾する副詞表現などがある

- c. 行為が等位接続される
- d. 行為に関する情報が文脈から補われる
- e. その他：whether/if ... or not 型に当てはめられる・発話への返答

西脇(2008) は、以上の要因に共通することは、行為（動詞）に焦点が当たって前景化し、行為の対象（目的語）が後景化するということであると論じている。まず (48a) についてであるが、何らかの行為が要求されるということは行為の対象よりも行為自体に焦点が当てられることを意味する。次に (48b) であるが、様態の副詞表現によって修飾されることによって行為の対象よりも行為自体の方に注意が向けられることになる。(48c) では、行為が列挙されることにより「何をするのか」という行為に焦点が当てられることになる。また (48d) は、直接的に作用する要因ではないにしても「行為の前景化・対象の後景化」の活性化に寄与する。さらに (48e) では、ある行為をするのかしないのか、あるいは、ある行為をいたのかしなかったのか、ということに注意を払うことにより、行為自体に焦点が当たることになる。

最後に、西脇は、行為が前景化する典型的な環境は行為に焦点が当たることであり、行為に焦点が当たる典型的な環境は要求を表すことであると主張している。そして、要求を表す典型的な統語形式が命令形であることを考えると、eat up と drink up が非顕在的な目的語を許す最も典型的な統語形式は命令文であると結論づけている。

## 5. 文脈による補充

前節では、他動詞の目的語が様々な要因によって非顕在化することを見た。その最も典型的な事例が命令文という統語形式であるが、この点に関して西脇 (2008: 130 注 6) は、「要求」という意味が命令形という形



で表された場合には、「要求」の発話の力に加えて目的語に相当する物が文脈から特定されるために、より一層非顕在化を促進する環境が整うと述べている。しかし、西脇はこの主張を支持するための証拠を何も挙げていない。そこで以下では、西脇が実際に BNC から引用している 4 つの命令形の例を参照しながら、この主張の妥当性を検証する。

まず、(49)を見てみよう。

(49) “Eat up, boy. Soon be time to go to school,” said Tom, placing a paper bag on the table. (BNC: CAB)

この例の直前と直後に(50a) と(50b) のような一節が現れている。

(50) a. Willie sat down to breakfast in a clean grey shirt and jersey, pressed grey shorts and polished boots.

He stared out at the graveyard.

It was a dull day.

b. Inside were two apples and a thick egg sandwich.

You can come back here for dinner if you wants [sick], or have it with the others.

したがって、前後文脈から(49)では eat up の対象が朝食のために用意されたリンゴと厚みのある卵サンドであることがわかる。

次に、(51)を見てみよう。

(51) Come on, eat up and then we can go and watch the end of the Grand Prix as well, can't we? (BNC: KCH)

この例の少し前に次のような一節がある。

(52) No it's er, mum, shall I finish this?

Mm mm.

All my carrots I'm eating.

I would rather you ate your vegetables, yes, rather than the chicken please.

したがって、(51) では eat up の対象がニンジン含む野菜と鶏肉であることがわかる。

さらに、(53)を見てみよう。

(53) Come one, drink up. (BNC: H8N)

この例の直前に次のような一節がある。

(54) Hush, Christopher, drink's coming, coming in a minute. He found it on the floor by the armchair, rinsed it, poured it half-full of milk. All right Chrissy, here we are, here we are, it's coming now. The child was still crying as Alan sat down with him, but he grasped greedily for the milk.

Here you are then. Hold it yourself.

Steady—steady now; Christopher gulped at it and started to choke, spluttering milk all over both of them.

Oh Christopher!

Here, give it to me.

Come on, hey, hey, steady now.

He patted the little boy gently on the back.

Chris started to cry again for the drink.

Alan gave it back to him, but when he had had two mouthful he let it drop.

したがって、(53)では drink up の対象がミルクであることがわかる。

最後に、(55)を見てみよう。

(55) “ ... Drink up and get back to bed. ” (BNC: AC4)

この例の少し前に次のような一節がある。

(56) Tug lowered his head and sipped.

The milk was hot on the roof of his mouth and he was sharply aware of the Woman sitting there, the sleeves of the night—shirt falling away from her strong, brown forearms.

Her eyes traveled from his face down to the mug which he held in his two hands.

The surface of the milk shivered treacherously, betraying his trembling.

Slowly she stretched out and cupped her own hands firmly round his, steadying and warming them.

Tug felt his hectic heartbeat slow down and his pulse grow calm, as if he were a little child being comforted after a nightmare.

したがって、(55)では drink up の対象がホットミルクであることがわかる。

以上の調査から、西脇 (2008) が命令形の例として BNC から引用している eat up および drink up は、いずれも[A]の場合と同様、言語的文脈から目的語に相当する物を補充できることが明らかとなった。そうすると、少なくとも命令形については、「行為の前景化・対象物の後景化」という一般化が本当に目的語の非顕在化にとっての原因となっているのか再考する必要があるように思われる。

## 6. 結語

本稿では、菅原(1994) で取り上げられている無目的語現象の中から、特に欠落している目的語の内容がかなり限定される場合である[C] に焦点を当てて考察を行った。[C]では、動詞が単独で用いられる時には目的

語の非顕在化が許される一方、不変化詞と結合すると非顕在化が容認されなくなるといった特徴が見られる。しかし、同時に数多くの例外があるという事実も観察される。西脇 (2008) はそうした例外について「行為の前景化・対象の背景化」という一般化により説明が可能であると主張しているが、データを再検討してみると、少なくとも西脇が挙げている命令形の例に関しては、目的語の内容が文脈から特定できることがわかった。それゆえ、今後はさらに多くの例を調べることによって、この一般化の妥当性を確認していくことが必要となろう。

## 注

- 1 例えば、Quirk et al. (1985) は、(i)と(ii)において欠落している目的語が、それぞれ alcohol、a meal または something と解釈されると述べている。

(i) John drinks (heavily).

(ii) We have eaten already.

- 2 Mittwoch (1971) は、(i) の例を挙げ、動詞と不変化詞との組合せによっては [+completive] という意味素性の機能が弱まる場合があると述べている。

(i) Mary is washing up/tidying up/cleaning up.

Mittwoch は、この例における不変化詞の主な働きは動詞の意味を変えたり制限することであると論じている。そのため、イギリス英語では、例えば wash up が「皿を洗う」という意味に特化され、目的語を伴わなくても構わないと説明している。

3 この制約は動詞が不変化詞と結合した場合にのみ適用されるわけではない。(i) と(ii) からわかるように、動詞が単独で用いられる場合にも課せられる。

(i) a. It took him two hours to drink a bottle of beer/the bottle of beer/the beer.

b. \*It took him two hours to drink (beer). (Mittwoch 1971: 256)

(ii) a. He has just drunk a bottle of beer/the bottle of beer/the beer.

b. \*He has just drunk (beer). (ibid.)

4 以下、例文の出典内における BNC は British National Corpus を表す。

5 命令形の場合に加えて、目的語の非顕在化を引き起こす5つの要因を概観してきたが、複数の要因が重なり合って機能する場合も存在する。(i) を見てみよう。

(i) a. I have to drink up quickly if I want to catch the last bus home. (BNC: K27)

b. She then busied herself around the room, the implication quite clear: I was to drink up and get out as quickly as I could. (ibid.: HU0)

(ia)では、話し手が「早く飲みきらなければならない」という状況に置かれていることから、「要求」という発話の力が働いている。また、drink up という行為が quickly という副詞によって修飾されている。一方 (ib) では、「要求」という発話の力が働いているだけでなく、drink up が等位接続された動詞句に現れている。さらに、as quickly as I could という副詞による修飾も受けている。したがって、(ib) では3つの要因が重なり合って作用していると言える。

## 参考文献

- Brody, M. and M. R. Manzini. 1988. " On Implicit Arguments, " In R. M. Kempson ed., *Mental Representations*, 105-130. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chomsky, N. 1986. *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*. New York: Praeger.
- Fillmore, C. J. 1986. " Pragmatically Controlled Zero Anaphora, " *BLS* 12, 95-107.
- Fraser, B. and J. R. Ross. 1970. " Idioms and Unspecified NP Deletion, " *Linguistic Inquiry* 1, 264-265.
- Fraser, B. 1974. *The Verb-Particle Combination in English*. Tokyo: Taishukan.
- Halliday, M. A. K. and R. Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- Kilby, D. 1984. *Descriptive Syntax and the English Verb*. London: Croom Helm.
- Lehrer, A. 1970. " Verbs and Deletable Objects, " *Lingua* 25, 227-253.
- Mittwoch, A. 1971. " Idioms and Unspecified NP Deletion, " *Linguistic Inquiry* 2, 255-259.

西脇幸太. 2008. 「動詞不変化詞結合と無目的語現象」 『英語語法文法研究』  
第 15 号, 124-138.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A  
Comprehensive Grammar of the English Language*. London:  
Longman.

Rizzi, L. 1986. " Null Objects in Italian and the Theory of *pro*," *Linguistic  
Inquiry* 17, 501-557.

菅山謙正. 1994. 「英語 ‘ missing objects ’ について」 『英語語法文法研究』  
第 1 号, 91-104.